

「生きる力」を育みたい。「生きる力」とは、自分で主体的に解決する力を持つことであり、そのため親は子どもに何をすればいいのか。まず、「体力」をつけること。「我慢」をすることを教えることとありました。
物があふれ、暖衣飽食、そして少子化、何でも自分が中心の子どもに我慢することを教えるのは容易なことではなく、親

卷之二

10



昨年の「生涯学習まちづくりフォーラム」。久々に刺激を受けた研修だったような気がいたします。

子育ては、最終的に「家庭の問題」、「親の責任」である。と、よく聞かれることがばです。また同時に、家庭の教育力の低下を危惧する声も多く聞かれるようになりました。そういう意味からでも、先日のフォーラムは、時代を直視したテーマではなかつたかと思います。「親・家

「生きる力」を育みたい。「生きる力」とは、自分で主体的に解決する力を持つことであり、そのため親は子どもに何をすればいいのか。まず、「体力」をつけること。「我慢」(だんぱう)をすることを教えることとありました。

物があふれ、暖衣飽食(だんぱうしょく)、そして少子化、何でも自分が中心の子どもに我慢することを教えるのは容易なことではなく、親

はどうすればいいのか、しっかりと考へて子育てをしていきたいのです。「切れる」「ムカつく」などは、自分の思い通りにならない現象のひとつだらうと思つて、いますがどうでしよう。

いずれにしても、学校・家庭・地域が三位一体となり、子どもを見守つていきたいと考えています。

連携を呼びかけ、子どもたちの見守りを地域に働きかけ、社会に期待しているのが現状です。須恵町で各小学校区が取り組んでいる「校区コミュニティーの推進」こそが、子どもたちのすこやかな成長を願い、地域での子育てにつながり保育所・幼稚園・小学校・中学校と家庭とが連携強化し住民の皆様に理解され、前進していく姿であると思います。

このことは、須恵町の取り組みが学校を拠点としたまちづくり、地域づくりの実践であり、各組織の力量が問われるこ

「家庭教育」について

通鑑一卷之二十三

社会構造の基本・土台となる家庭の姿、家庭の教育力の現状を考えますとき、ひとつづくり・まちづくりの、はたまた生涯学習の要となる社会教育の見直しも必要ではないかと思うこともあります。

須恵町の「校区コミュニティ」の実践が、人（健常者・障害者）と自然が共に生きる「共生のまちづくり」。子育て支援室が取

「家庭教育について」須

たいと思います。

「思つこと」

一小PTA会長 梅野 猛

「子育てをする親の役割」

須恵中PTA会長 楠林政彦

となる体力・社会で生きるために
の耐性・規範の厳守・基礎学力・
思いやり・やさしさ等を持ち合
わせた総合的な人間の形成で
あるということです。もつとわ
かりやすく言えば、子どもに社
会的な「自立」をさせるための
教育を行うということです。
子どもを「自立」させるための、
家庭教育の役割は、学校週5日
制の導入以降ますます重要な立
場にあります。
近年の日本の子育てについて、
特に家庭では、子どもの立場に
たつた教育が目立ちます。子ど
もに辛いことはさせない。我慢
させない。させられない。いつも
子どもを擁護する視点です。
しかし、子ども側の立場に立つ

厳しい経済情勢が続いている中で、子育てをしている親にどうしては苦しい時であり、核家族化で教育する必要があります。子どもは、兄弟、姉妹であつたがつて子育ての方法もその子によつて多少違つてきます。子育ての一般論はあつても、我が子の子育ての各論はあらかじめ存在しません。

児童教育の専門家、学校関係者、それと子どもの祖父母（親の両親）、いろいろな方の話を聞き、相談し、指導していただき、自分なりの子育て論を作つていかなければなりません。

私を含めた子育て真最中の保護者の皆さん、悩み、迷い、反省点を話すことで共有し、地域の中で育つ子どもの育成を推進していきましょう。

の 中で大切なことを何か忘れて
いるのではないでしようか。ここ
数年、家庭教育だけでなく地域
の方と子育てをする時代へと変
わってきて います。須恵町には、
小学校単位にコミュニティーや
あり、その中にアンビシャス広
場が開設され、地域のお年寄り
が子どもたちに昔の遊びを教
え伝えていきながら地域の子
のみなさんいかがでしたか。今
回は、昨年の生涯学習まちづく
りフォーラムに参加された社
会教育委員5人の方から、当日
の感想や自らの子育てに關し
ての思いを述べていただきまし

どもたちと関わりを持たれて
います。親も地域の方と関わり
を深め一緒に考え学び、よりよ
い教育環境をつくることにより
親として家庭・地域の役割が見
えてくると思います。将来を担
う大人に育てなければならぬ
心豊かな人に育つてほしい願い
は皆さん同じだと思います。

卷之三

た教育では、子どもは「自立」しません。自分のことは自分で判断

の中で大半の家庭が共働きの生活だと思います。忙しい時にどれだけ家庭の中でコミュニケーションが図られているのか考えます。

演会・研修会に参加して「子育て」のことで、子どもたち自身の体験不足により、自分で考え方解决问题の低下、また、人に對しての思いやりとやさしさが薄くなっている。

はたくさんあります。が、基本は「家庭教育」ではないでしょか。ある冊子にこんなことが記してありました。「親が子に期待するの二回」、つまり、子は親にて

ていきます。思いやりの心をもつて接すれば、話をするのが安心で楽しくなり、いじめなどの悩みも自然に親に打ち明けられるようになるはずです。

このような生活環境でも、子育てをする親は家庭で子どもと向き合い、コミュニケーションをとりながら教え・伝えることが親の役割であると思います。

私たちの子どもの頃は、近所

なつて いると言 われ て い ま す。 こ れ は、 親 と し て 今 の 子ども の 状 況 を 受 け 止 め な か れ ば な ら ない の で は な い で し ょ う か。 情 報 化 が 進 み、 欲 し い 物 が す ぐ 手 に 入 る 現 代 社 会 と 反 対 に、 生 活

「子どものことによく知ること

こういった、子どもをほんとうに思いやるということだけでも、「子育ての新しい世界!」が見えてくるのではないでしようか。